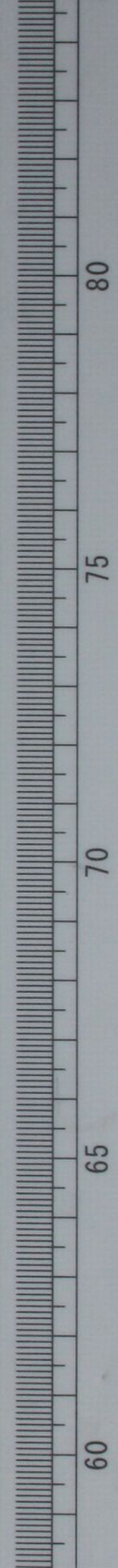
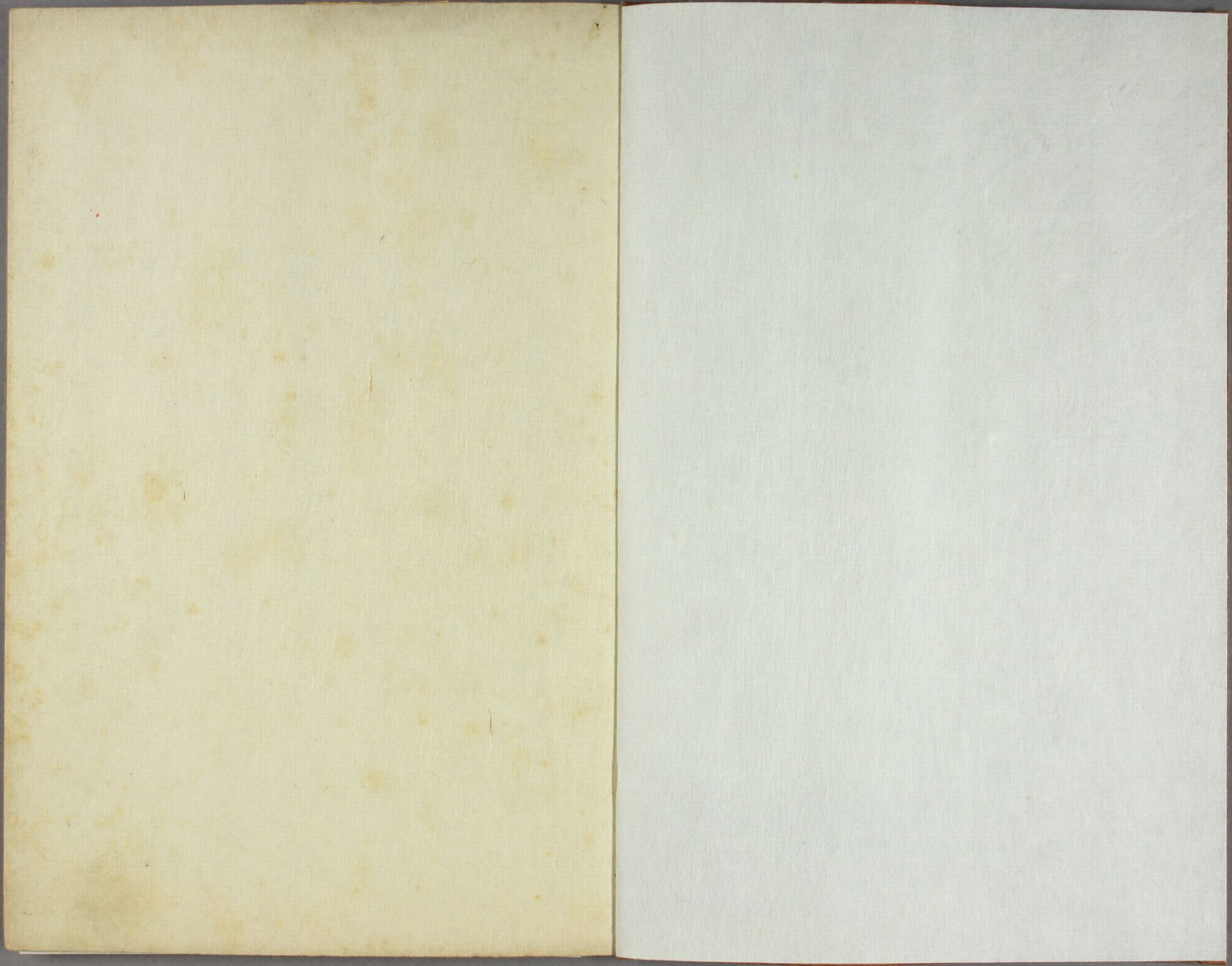




中村俊定文庫
文庫 18
228



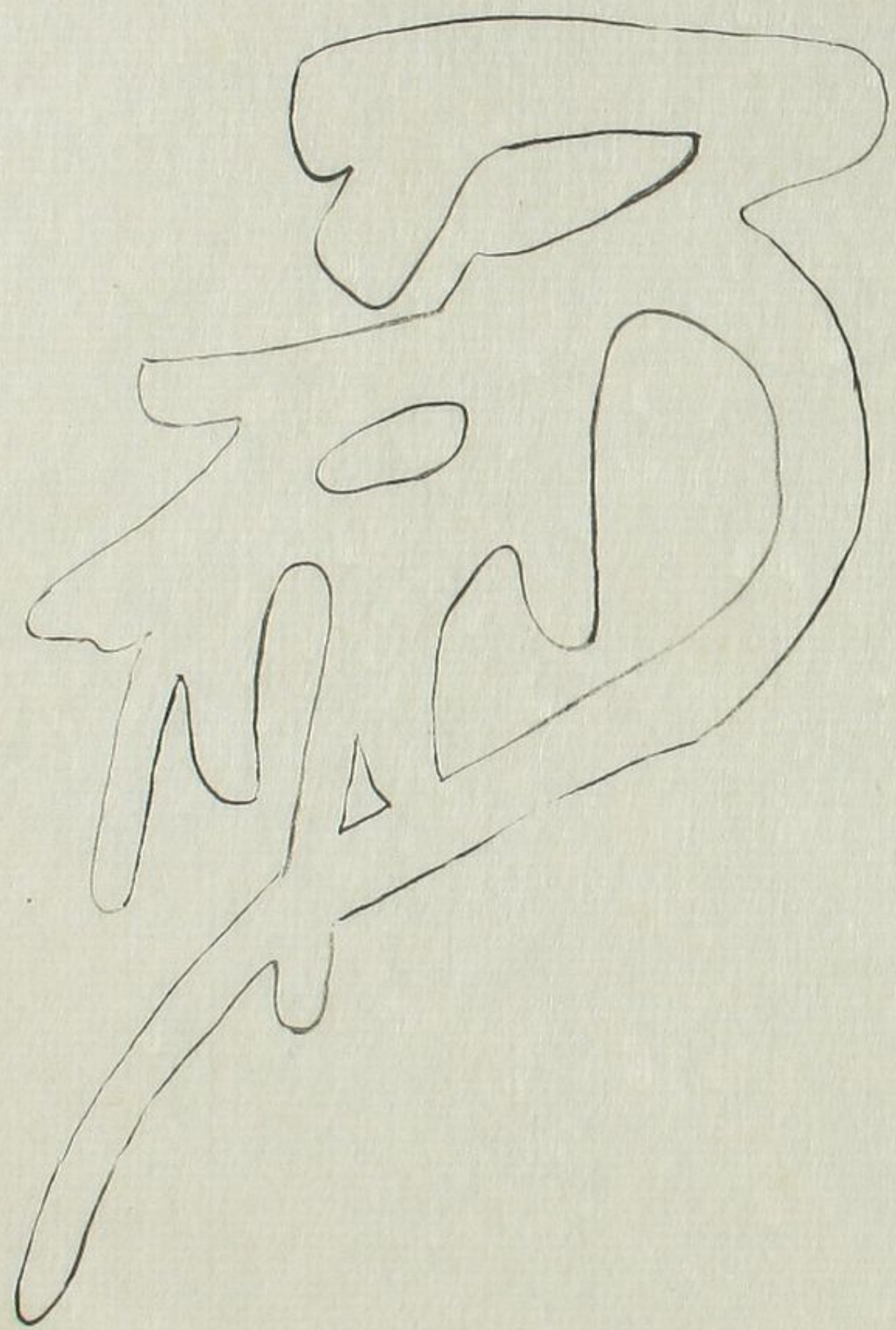


玄裳縞衣道士在田塍之
中春日栽陽躬緩步培客
姓者晉子有試毫鵝步句今
也幸存在鵝步叟之家故自
稱曰鵝步叟者深川市長
平野氏或時叟謂余云所在
以平野得名者五其東南以



永代得名者五清名我亭以
五身幸也余云杜詩雲近
蓬萊豈五色以永代島
準擬于蓬萊叟亭之名之謂
五雲可乎叟欣然云可也固可
也 甲寅之冬午寂為五雲亭

錫安叟識



齊

梧 齋
高

森森

其角



其角

日乃春をこよすに霧の歩む哉

初下 雪村 柳 文鱗

雪村 柳 松風

酒の幌トナリよ入あひさる月 二齋

秋の山タツ葉カ乃カられを賣ん 芳重

炭竈ツツこもくまのこしらへ 杉風

里へそまはりのうねむる緑 仙化
 ぬのう動干 ぬねほひせし 李下
 ぬをたふし海をこもむたぢし 挙白
 念佛 ぬくふ侍つくより 朱絃
 あまふし連哥の真をよます 蚊足
 敵をよますもぬねのたけ ちり
 らぬの利木赤烏帽子よらりらる 芭蕉
 うよ世のち海をよまのえんねきん 筆

らぬのれ 宿の本程のまひひよ 文鱗
 後任心女をぬらうちく 其角
 山場うこ乳をぬのむ猿のたけ 三齋
 余が甲冑のぬをぬきぬみ 枳風
 法のと我制り髪を埋こぬん 杉風
 とらうの記をとらう軒の戸 芳重
 とらうより車かう押るぬの法 李下
 椿を小雨をぬぬらけぬ 仙化

殊る雪のいばあははあしと
 志つらに破る膝をよほし
 ぬきぬきあはれあはれ
 こげこげ眉まうこふふ
 豊子いにて情よらんるあはれや
 何れげあはれよあはれ切や
 かれささ下もあはれけきあはれ
 あうれ月あはれあはれ
 朱絃 峯白 芭蕉 枳風 其角 二齋 文麟

るの戸植鞆まの坊にきよまで
 日れ三代の刀うり 源治
 永祿を金冬く松の
 近江の田植るあはれに恥せん
 とく怒くゆあはれにせん時鳥
 船をよあはれの湯の浦あはれ也
 はくまて人の姫をよつれ
 孫勤の堂よあはれあはれ
 峯白 李下 仙化 朱絃 其角 芳重 其角 李下 枳風

待くしの鐘を^{オチ}満き^{オチ}草の中
 交よ小^{ヒキ}燈のおよぶの影
 面さへ^{オチ}ふらや^{オチ}かひげ^{オチ}鄙^{オチ}あり
 門を魚は^{オチ}子^{オチ}磯^{オチ}さ^{オチ}ん^{オチ}寺
 理ぬ^{オチ}今に^{オチ}あ^{オチ}ふ^{オチ}武者^{オチ}等^{オチ}
 あ^{オチ}う^{オチ}野^{オチ}の^{オチ}牧^{オチ}さ^{オチ}る^{オチ}御^{オチ}院^{オチ}
 鳥の^{オチ}一^{オチ}暮^{オチ}う^{オチ}夕^{オチ}日^{オチ}を^{オチ}か^{オチ}る^{オチ}
 紅^{オチ}さ^{オチ}る^{オチ}籠^{オチ}屋^{オチ}秋^{オチ}さ^{オチ}る^{オチ}し^{オチ}た^{オチ}なり
 李^{オチ}下
 文^{オチ}鱗
 其^{オチ}角
 芳^{オチ}重
 奉^{オチ}白
 三^{オチ}齋
 仙^{オチ}化

電の^{オチ}木^{オチ}れ^{オチ}ら^{オチ}き^{オチ}ら^{オチ}の^{オチ}こ^{オチ}ろ^{オチ}ん^{オチ}せ
 つ^{オチ}ま^{オチ}れ^{オチ}ぶ^{オチ}も^{オチ}い^{オチ}ま^{オチ}れ^{オチ}ら^{オチ}ぬ^{オチ}及^{オチ}ん^{オチ}と^{オチ}く
 人^{オチ}あ^{オチ}ま^{オチ}い^{オチ}ま^{オチ}れ^{オチ}ら^{オチ}ぬ^{オチ}物^{オチ}を^{オチ}か^{オチ}ら^{オチ}む^{オチ}なり
 三
 三^{オチ} 比^{オチ}國^{オチ}の^{オチ}武^{オチ}仙^{オチ}を^{オチ}あ^{オチ}る^{オチ}給^{オチ}風^{オチ}せ
 三^{オチ} 高^{オチ}を^{オチ}一^{オチ}汲^{オチ}さ^{オチ}る^{オチ}醒^{オチ}井^{オチ}を^{オチ}水
 三^{オチ} 玉^{オチ}川^{オチ}を^{オチ}あ^{オチ}く^{オチ}六^{オチ}乃^{オチ}所^{オチ}み^{オチ}く
 三^{オチ} 江^{オチ}湖^{オチ}く^{オチ}一^{オチ}年^{オチ}よ^{オチ}わ^{オチ}に^{オチ}き^{オチ}り
 三^{オチ} 仙^{オチ}化
 三^{オチ} 朱^{オチ}絃
 三^{オチ} 其^{オチ}角
 三^{オチ} 揚^{オチ}水
 三^{オチ} 枳^{オチ}風
 三^{オチ} 奉^{オチ}白
 三^{オチ} 三^{オチ}齋
 三^{オチ} 芭^{オチ}蕉
 三^{オチ} 仙^{オチ}化

夕シヤク花乃ニハ精シヤクのよあるか
 竹タケうらうらむハ雀ハうらうらむハ
 南ミナミむくハ昔シヤク屋ヤのカ畑ハのカおハ房ハて
 親オヤとト茶チャとトうウつツ晝ヒルのカつツれレて
 餅モチ作ツクらハちハらハのカ廣ヒロ比ヒをヲ命ノチ
 勢セウとト買カうウくク秋アキのカらラとト
 鹿カのカ香カをヲ物モノつツとトあハいイとトあハいイのカ
 うウとト又マタ男オトコのカ鼻ハナすスらラ月ツキ
 不フト
 朱シユ絃ケン
 不フト
 文ブン麟リン
 松マツ風カゼ
 揚ヨウ水スイ
 不フト
 揚ヨウ水スイ
 不フト
 松マツ風カゼ

台ダイ乃ノるル袂タビ七シチ里リをヲぬヌるル後ノチ
 伊イ弼シツ河カ内ナイのカみミとト此ココ川カハつツ
 水ミヅ車クルマ来キつツくク香カをヲあハいイとトあハいイのカ
 梅ウメハハさサうウとトさサらラ院インとトをヲ閉ト
 二ニ月ツキのカ香カをヲあハいイとトあハいイのカ
 姉アネはハ牛ウシのカおハとト又マタ日ヒをヲ親オヤ
 胸ムネあハいイとトあハいイのカ緒オビをヲおハいイとトあハいイのカ
 松マツ風カゼ

麦乃んをさあつみりせたるは 文麟
 本魚さこゆる山陰も 李下
 囚をやくて休むるお月夜 三齋
 萩さし出さおつりまあひ 不卜
 同一時落とる名を付す 千春
 心やうらん世を蝉一乃く 朱結
 とほな物むらぬれ極まる野山 仙化
 あるそそるるもの鳥さる屋 李下

名

頭城をいばるあめふらふは 文麟
 鏡よめあめあうのうらら 芳重
 竹原を筆おろかむ務りわく 翠白
 梅まぶさる年白し甘のあまも 三齋
 村るよりの所らあははぬ 峡水
 袍と袖をれ伸も教は 仙化
 何物をいふは月に影のほろ 不卜
 榊ケヤキよるよる 栲造 飛 李下

伝き此流のまはりてやゆらん 揚水
 居てとよはるゝかゝるの児 文鱗
 ありて牡丹十里の香をまき 千春
 ちよもむかひぬは湯をまき 峽水
 山を縁少くまき地を縁をまき 其角
 名^ら ありて三井のふりて流るゝ 三齋
 名^ら ありて流るゝ 仙化
 名^ら ありて流るゝ 芳重

名^ら ありて流るゝ 揚水
 名^ら ありて流るゝ 其角
 舟より流るゝ此川傳ひ 松風
 名^ら ありて流るゝ 峽水
 名^ら ありて流るゝ 不卜
 名^ら ありて流るゝ 峯白

其角九	文鱗八	枳風八	口齋九	芳重八	枚風二
仙化八	季下九	舉白八	朱結六	收足一	古夕二
芭蕉六	揚水五	不下四	千春三	淡水三	筆下二

貞亨三丙寅年正月

貞亨とこれと一丙寅
晉子曰のまゝと云 而 韻
初懐紙と蹄——
世と鳴ことと云と——予
其丙寅と云と生れ病の
あゆと云と一軸松羅の
まゝと云と云と云と云と
も幸ふと云と表徳とす。のこ

六章

軸をほつては梅の急所は祝
猿の神好家春もあまた
朝は目乃のまゝ猿をたはらして
水より石より生れ出と云と
一は鳥好れあまをあむむ月
梢筋うの秋なまや風

鶴歩
文麟
貞佐
松羅
老鼠
執筆

志又 齋ありん
吟を 吟

杉風

名菜野や齋付初し是の初

かも出たうも梅は凡 毎

湖十

井のえんらん裂鬮長深う

青岷

くさし二俵をねくし（中）れ

鶴歩

見附くとき宵の月を暮の供

起波

うすむさびるはふ種のはは

執筆

ッ

生方魂を食を門の賑がし

湖十

鳴はしめを祇園清水

杉風

るまけて起法のみより（中）り

鶴歩

向ふけ膝へ我なみりか

起波

茗茶切も茶碗の外へ乱 髪

杉風

出窓の棧敷を借留よりわ

青岷

帷子ハ螢小紋よりくねて

起波

りけて（中）船の（中）運（中）木下川

湖十

蒸籠をくはのあしを荷ん 青峨

今も花ハ盃の中 鶴歩

枯芝は維子一はうい二月月 湖十

麻といほとぬて 留家 菟入 杉風

子んの錢もなぬ銀を拵 鶴歩

いせをの延世 頼まも(中) 超波

除はくゑの名跡又況々立 杉風

床臈を喚り行 奴 青峨

他は成とぬがさるぬのを毛さ 超波

巖子といへもつゝぬ小鞆 湖十

盗人を捕へつゝあて堀の松 青峩

下はまゝ七芒大寺 鶴歩

かす卑のくいとねもふ(中)もれ 湖十

に又目はくく餞別の會 杉風

新内の海に都若其堂所 鶴歩

南呂と養ふ人の勿体 超波

名

上

名

白菊の露は青嵐のほほゆめ
 池田伊丹の玉簾の外
 生千代をきくのさうめ切封
 ひとわりやむと皆止家恋
 木おとこのかりす花も夜の道
 防風は茎よ誰か風お粉
 青嵐
 湖十
 超波
 青嵐
 鶴歩

鶴

雛露やうらぐ藤若の旭
 露をさかすむは流るれ
 春を湖岸にかくれぬお粉
 只もとをわたりおふや
 花お粉や七むと子あみ
 青嵐
 超波
 湖十
 有依
 老嵐

月

美風をえ送はわづらむ見哉
 午寂

何ともぬ田標吸ふまは霧霧の咽 長水

霧

紅毛の船もふ霧霧の舌圓と
いとゆふにほぬや霧霧の船日乾
籠居の敷かうてや 初子原 慶残

松羅

文鱗

学園の士うぬぬ 葉先梅と
うも平壁の氏勢霧人め我
あしは亭阿利 五こし
名つり事ある一鳩 林波の
去名席下下海し 此亭や
永代古舞の花下ちちる
あし 聖新田に農務清し
永代橋上の富士平壁

橋下の水酒家阿里海家
あなまの喉橋の夕ま
去る所阿波人下りてを
はのおれ難波の人筑
いふ所を阿に今此橋
具のりてまお海が
御文ホ来居しとめ
梅さうりちま

うとまを人おし
うめおしう
句をとて一
者尔流俗の
阿に詠や梅
まのおう阿

無湖十

名乃みりほこほし
はつ年よかろし

るれ白の稻荷も五社も梅若む

鶴歩

津赤古鼓代に常にお喜

杉風

雀子もや雀も雀も雀も雀も

梅五

梅

寛軒軒

物として咲かぬをそりて園若梅

橋沾

新ふや二十又日れむめの神

同

回

梅若門めくも河いすたく我

午寂

風鈴のたこも梅乃新若也

長水

回

梅の花ごあやしくせん春もあや

文

梅の香や草刈後の草一莪

李

梅の香や隣里人のおしはるや 庭洲
忠孝乃石に咲や名はれは清溪
すれさくやも如氷流の水乃湯気 寛子

日

梅の香や先づいとも梅の香や 魯兆
裸まき生れぬ梅えらるはしよ 淡中

日時計に厨み初つ梅せん花 籬窈
むめう香や月下陰のた文字 柴翁
あしくと梅の匂出しひうつ 路十
菽越に借すたう借も梅の風 木十
海色又朝日を祥梅見らば 永示
白魚も帆もるし梅の宿 橋五
舟しり路もあつちや谷の梅 機丈
庭女のふれし先梅の香 湖岸

梅

梅はくちやほおれ 善美の持し 岷
 さほ娘の匂い 依衣えむめの花 文十
 梅さくや 菴山くおけ 旭うけ 水示
 葉の咲や 去る日へ 懐て 表久 車葉
 香車よと 神さきや かし 梅の花 茶井

目

生解る目には 降よと 梅の花 素夫

おとと見し 梅の子 梅を 匂い 乳 黒己
 梅さくや 初も 東坡の花 顔 始葉
 さぬりや 香やん せん ぬる 湯 湯 其蒼
 こころいも ぬき ぬき ぬき 神の眉 異川
 梨人の 馬帽子 さんぬ 目も 梅う 者 可容
 梅さくや 小畑の 田さん 人 毎う 其畔
 梅さくや 経 経 経 けり 玉う 柔楊
 梅さくや ぬき ぬき と けり ぬき 至

今もその飯を捨てる梅のむ 業
 七の屋の中よ包んむあのも 来史
 小月を顔よりけりえ梅のむ 其條
 牡丹より被ても留まりけさの梅 山郭
 昼に睡ずれば小鬼もあつたの毒 志静
 梅はくちや小野をむけはくちよ 業也
 神農辰の唇をきく梅の花 其樹
 蟬射れた武夫もあつたよ梅の志 蓮谷

梅

毒れ花をたふす香煙はなうりり 女 真砂
 うつくしや猿もあつたむあのも 女 梅水
 つまもあつた法くたふさす神の梅 女 鶴子
 さゆのちよあつたへ恒かん梅 女 琴松
 梅もあつた白装束神のむき 女 琴重
 川舟の上舟もあつた梅のむ 女 琴糸
 紅白もあつた梅の咲く 童 千口

梅乃叔もよらい人つ出さるる

童 春葉

梅

曉のそらちうや梅れも

雨槐

も欠るや梅と唱れ口舌内

駒夕

よよもあう白ひ梅く下

黒山

梅あつむしの花は梅のを

起月

梅

梅はくや山神の控振さく望し

更登

はまのけの縁をたわや梅をん花

飛鯨

むね白の里や子ちの影さるる

帰耕

梅もあらし白雲の世のあらし

都衛

傾城もあらし世のあらし梅をん花

声谷

空一川明て世もあらし梅の花

薄文

もめもあらし世もあらし人のあらし

雕車

立雲のけし針もあらし梅をん花

沙牛

こもあらし世もあらし梅の花

半主

白首出で惜きし花乃

文貞

五女

梅の香や垣根をよそ物うこそ

松蘿

伊勢の御衣の花の後や一二口ん

沾古

枝ふらのばよきを梅の減うふ

斗南

ふりしうは難いかきり梅の花

海五

酔まをわすれきせ別梅のむ

青珣

梅

おの香人をかき梅畑屋酒

舟木

舞柳のさかすかの梅の凡

鯉州

おの南梅の白くや枝隣

投壺

梅の花はあゝい枝のなうゆを

棹波

思ふふを白くえあし蒼梅

文餘

五女

あゝ梅や花の傾城なるものを

園二

梅はくやうとら乃い存す免

杉風

梅

梅はてしなく暖の家とあやめち **午叟**

梅は白く月をまぬけと鼻の穴 **山夕**

梅は青々と開くは清く梅は **青峩**

梅は原を穿ちておぼの花 **起波**

梅はあやめち少女の梅は **湖十**

梅は白く雪の如くは **有先**

梅は人とは異なり梅の花 **老嵐**

歌仙

梅乃志本に寝るを歩を足 **貞仇**

梅は流るる梅は **鶴歩**

梅は色も出ず梅は **午寂**

夕馬場は風をこぬ **長水**

梅は常れぬ梅は **鶴歩**

梅は入とあやめ **午寂**

鳴海に毎夜かきしよ者の聲 長水
 さしと二ふして大でも小でも 貞依
 巖柳といふもあす砂に立 午寂
 公の木の相もいふも流し 長水
 うきと語ざる女を袖に 貞依
 志う我々兎角と日寐みし事 鶴歩
 汲筒のあはれはさうぬ竹生島 長水
 借うすたるをいふつてあめる 午寂

ちの穴をのうけとせみ花成思 鶴歩
 瑞草のよも里へあつたけぬ雛 貞依
 出海をばし月乃さくらも 午寂
 木花嬉しことばに波も 長水
 しみきれいつ海に柄袋 鶴歩
 子細中口をゆくと雨掛 午寂
 煙火の日のめもあふ古 貞依
 もし 挿振を厚もろける 長水

はちのよむいほとふる綿 午寂
 負へたつもあつ付 鶴歩
 いやあたま鬼町のつらさ 貞依
 すれと思ふ皮を投り 午寂
 川の中ふる入るまゝ 長水
 杉原振若衣さぬ 貞依
 けんこんて家さも回れ紅糸 鶴歩
 見もあに流れぬ芽の門 長水

ナウ

けんあつお加甘念般揚 貞依
 為るまゝお大寺の鶴 午寂
 一二度を除くあひ 鶴歩
 寺れあも産むとわが 貞依
 いはを止し狐も花さぬ 長水
 こゝ入るあつらぬ 鶴歩

崔叟の一集を写し
辛て又此紙成る
きりあまのし右軍を
鶴を数め余ハ宿を
詠し

雪の末ぬ日ち放セ梅に宿 其樹

鶴のあまをこし
あまのし小冊を
五雲亭

毒々ま地羽へきみよ又婦宿 鶴歩

再日子以て秋少作番
牛をいれ鶴の歩の筆
且と帰てと秋を飛程
秋後語しそとさる人ハ
空出歩子也我の家ふふ
よそ集と好む男形存小
徳唯山に林に座の末

とらふは〜千の
ら〜とらふは〜
名と〜とらふは〜
能か〜とらふは〜
あ〜とらふは〜
とらふは〜

福来ぬ



